

病者の祈り (ニューヨークのリハビリテーション研究所の壁に書かれた一患者の詩)

大事をなそうとして力を与えてほしいと神に求めたのに、
慎み深く従順であるようにと弱さを授かった

より偉大なことができるように健康を求めたのに、
より良きことができるようにと病弱を与えられた

幸せになろうとして富を求めたのに、
神の前にひざまずくようにと弱さを授かった

人生を享楽しようとあらゆるものを求めたのに、
あらゆることを喜べるようにと生命を授かった

求めたものは一つとして与えられなかったが、
願いはすべて聞きとどけられた

神の意にそわぬ者であるにもかかわらず、
心の中の言い表せない祈りはすべてかなえられた

私はあらゆる人の中で最も豊かに祝福されたのだ



自分にとって大切な人…家族、友人等々。ある日、突然、病を宣告されたり、介護したり、死を見届けたり……。どうやって生きていったらいいのか路頭に迷ったとき、私はこの詩を読み返してきたように思う。たくさんの方々に支えられながらの毎日であるにもかかわらず、先が見えなくなり悶々としてしまう。そんな時、癒やしてもらったり、鼓舞してもらったり、戒めてもらったりしてきた。

母にも、父にもこの詩を送り、(親子なもので珍しく通じた?) 死別までのそれぞれの時間を、私はものがきながらも感謝し、愚痴をこぼす日もあったが、感謝の言葉を交わし合って過ごした。

そして、それが今の私の生きる原動力になるとは思いもよらなかった。自分にとって壁と感じる病もいくつか付き合ってきたが、さらに大きな壁を感じる病と対峙する日も来るだろう。どれだけこの詩を受け入れて病と闘えるものかと不安と恐れが先立つが、神の意にそわぬ者でもこの詩をたどっていったら究極の自己実現ではないかと思うようになっている。

なにやら、やはり、私にとって難しいことになりそうで終わるが、まだまだ思慮も慎みも足りない私ゆえ、また、この詩を読み返し、支えてもらうことになるのは間違いなさそうである。